

自動車と『偉大なるギャッツビー』

丹 羽 隆 昭

I

アメリカにおける 1920 年代は、一方では未曾有の物質的繁栄、もう一方では著しい精神的荒廃という二つの対照的な側面を有する、華美ながら不安定な時代であった。第一次世界大戦（1914-18）は、アメリカを国土が無傷の戦勝国とし、疲弊した老大国イギリスに代わる世界の政治、経済上のリーダーへと押し上げる役割を果たした¹。しかしその反面、この世界的規模での大戦争は、それまで国の精神的支柱であった特有の理想主義的で楽天的な世界観に対する決定的懐疑を国民の間、特に直接欧州戦線に出征した若い世代の間に植え付ける結果となった。戦後景気で大いに沸き、派手な風俗の流行を見たその裏では伝統的な価値観や社会秩序の崩壊が進行し、暗い時代の到来を予兆してもいたのである。空前の投機ブームの現出、映画やラジオなどマス・メディアの発達、野球の Babe Ruth に代表されるプロ・スポーツの隆盛、自動車の急激な普及、フラッパー（flappers）と呼ばれる大胆奇抜な女性たちの登場、乱痴気パーティーの流行、政界スキャンダルの横行、有名無実の禁酒法の下でのギャングたちの暗躍、サッコ・ヴァンゼッティ事件の如き冤罪裁判などで歴史に名を留め、「狂乱の二十年代（Roaring Twenties）」とも称されるこの誠に奇妙で危なっかしい時代は、やがて 1929 年秋 10 月のウォール街での株価の大暴落により、俄に終わりを迎えることとなる。

さて、この時代世界の一等国となったアメリカで、その物質的富と繁栄を世

界に示したものは何と言っても急速に増加した自動車である。「一人一台」を謳い文句に文字通り大量に生産され、全米の街に溢れ出した自動車こそは、折から幕明けを迎えていた大量消費時代の花形的存在でもあった。アメリカは当初自動車先進国であったわけではない。自動車開発はヨーロッパに遅れを取り、蒸気自動車の完成で約1世紀もの差、ガソリン自動車の完成においても十数年の差が生じていた。自動車王 Henry Ford が第一号の試作車を発表したのは、フランスの Nicholas Cugnot が最初の蒸気自動車を発表してから127年後、ドイツの Daimler と Benz が共同開発で最初のガソリン自動車を発表してから11年後の、1896年のことである²。世紀の変わり目、いわゆる“the turn of the century”でのアメリカの都市には自動車が未だ殆ど見当たらず、昔ながらの馬車が幅をきかせていたという。当時の自動車は「富豪の玩具」³だったのである。その自動車の数を爆発的に増大させ、大衆の手に届くものとしたのは、言うまでもなく1913年に始まったベルト・コンベヤー導入によるT型フォード (Model-T) の大量生産であった⁴。単一車種の大量生産は車の低価格化、高品質化を実現し、他方 General Motors などフォード以外のメーカーも生産競争に参入するに及んで、自動車は戦後の好景気の下、大量消費のブームに乗って、家電製品などとともに、またたく間にアメリカ人の生活に浸透し、以後のアメリカを「車に乗った国 (the country on wheels)」として確立していった。1920年代はアメリカを自動車王国とした時代であったと言える。

ところで、その1920年代は、文学的に見た場合、アメリカ小説のアイデンティティー確立の時代であった。精神的には荒廃して「荒地」とも形容された時期ゆえに一見奇妙とも言えようが、この時代はアメリカ文学史上、19世紀中葉のいわゆるアメリカン・ルネサンス期と比肩し得るほどの豊作期であり、とりわけ1925年近辺は文学史上の特異年とも言えるべく、多くの優れた作品が次々に生み出された⁵。この推進力となったのが「迷える世代 (the Lost Generation)」と呼ばれた戦争世代の若い作家たちである。戦後の深い幻滅から祖国を離れ、当時のドル高を利用してパリで文芸修行に励んだこの「亡命者たち

(exiles)』⁶ はその後再び祖国に戻り、新しい感覚の文学の創造に貢献した。折からの、芸術界全般に及ぶモダニズムの運動とも連動して、「亡命者たち」の文学創造は、それまでどこか洗練味に欠ける地方文学という性格を脱しきれないでいたアメリカ文学に新鮮で洗練された血統を加えたのである。詩の分野での Pound, Stevens, Hart Crane, それに W. C. Williams らの貢献もひととおりではないが、アメリカ小説を史上初めて世界的なレベルにまで引き上げた Stein, Fitzgerald, Hemingway, Dos Passos, Faulkner らの貢献はまさに特筆に値するものであった。

この時代のアメリカ社会の特徴を極めて色濃く伝える代表的な小説のひとつが F. Scott Fitzgerald の『偉大なるギャツビー (The Great Gatsby)』であることには何人も異論はなからう。20年代のまさに中央、「特異年」の1925年に発表されたこの小説は、それまでのアメリカ小説とは一味違う、現在から見ても相当にモダンな小説であるが、注目すべきは、これがアメリカ小説史上自動車に重要な役回りが与えられた恐らく最初の純文学作品であることだ。自動車が登場する印象的な小説と言えば、同じ年に発表され、同じような主題を持つ（しかしジャンルの的には紛れもなく前世紀末の「自然主義小説」に属する）Theodore Dreiser の『アメリカの悲劇 (An American Tragedy)』も、第一部、第二部と自動車が登場し、特に第一部では主人公を含む少年少女たちの無軌道ぶり、無責任ぶりを浮き彫りにする自動車事故で物語が幕を閉じるなど、興味ある比較の対象のひとつに数えられようが⁷、作品全体における自動車の役割や意義の重さでは、『偉大なるギャツビー』に到底及ばない。

『偉大なるギャツビー』は、作中にただ色々な自動車が登場してくるだけではない。主要登場人物の全てが自動車を所有する他、彼らの生活が何らかの形で自動車と密接に係わっており、さりげなく自動車用語が口にされたり、登場人物の性格が自動車の運転態度を通して伝えられたり、更には小説の背景となった時代の特異な性格までが自動車を媒体としてみごとに暗示されているのである。『偉大なるギャツビー』は風俗小説の特質をはっきりと示している

が⁸、そこに描かれた時代の風俗の代表が自動車であり、自動車なしにはとても成立しない小説だと言って過言ではない。

これほど自動車に重い役回りが与えられているにも拘らず、従来この小説における自動車の意義を正面切って論じた研究は何故かあまり見当たらない。本稿は、時代のシンボルとしての自動車という視点から、この「20年代の証人」とも言うべき作品を再考する試みである。

II

『偉大なるギャッツビー』には幾台もの自動車が登場して来るが、小説の展開に沿ってまずひととおり概観しておくことにしよう。なお初めに一応確認しておかねばならないのは、この小説の主たる事件 (action) が起こる時点、即ち、語り手 Nick Carraway が語る Gatsby を中心にした「一夏の物語 (the history of a summer)」⁹ の背景は何時かということである。これは、例えば第6章で、Gatsby が或る秋の夜、「驚異のミルク (milk of wonder [86])」を採るか Daisy という「花 (flower [87])」を採るかという——建国時の国家の進路選択にも比すべき——重大な選択を行ったのが“five years before” [86] とされており、第4章にははっきりと彼の恋愛も出征も1917年であった (That was nineteen-seventeen) [60] と既に言及されているので、単純計算からこの「一夏の物語」の時期は1922年ということになる。また、第4章では“The Sheik of Araby [62]”，第5章では“Three O’Clock in the Morning [75]”など、まさしく1922年に流行したとされるアメリカの流行歌が挿入されている。1922年と言えば、アメリカでは、「ヘンリー・フォードの一日当たりの収入は26万4,000ドルを超え、アメリカ連合通信社から億万長者の名を与えられる」¹⁰ と或る物の本には記述されている。この年はまた「ニューヨークで最後まで残っていた消防馬車が最後の出動をした」¹¹ ともあり、馬車の時代が終わって自動車全盛時代が到来していたことを示す。もっとも小説中で Gatsby が既に

「水上飛行機 (hydroplane [39, 44, 51])」を所有していることから伺えるように、時代は早くも飛行機の時代にも入っていた。Lindbergh の大西洋無着陸横断飛行は5年後のことであった。また文学的に見れば、この年 T. S. Eliot の『荒地 (*The Waste Land*)』や James Joyce の『ユリシーズ (*Ulysses*)』が発表された¹²のであり、両者の影響はこの物語にも少なからず伺える。

さて、最初に登場するのは語り手 Nick が第1章で自分の持ち物として言及し、第9章で「食料雑貨品店に売った (sold to the grocer [140])」という、作中殆ど動くことのない“an old Dodge [7]”である。Dodge は後に Plymouth とともに Chrysler 社に吸収されたが、丈夫な中産階級向け自動車を作るメーカーで、この車を中西部出身で堅物の青年証券マン Nick が (中古ながら) 所有するのはうなづけるが、この車が走るのは、第5章で、Nick が Gatsby と Daisy とを自宅で会わせる例の雨の日のこと、家政婦を呼び、若干の買物をするため West Egg の村を走らせた時くらいのものである。同じく車を所有する他の主要登場人物と異なり、例外的に彼は作中殆ど自分の車で移動することをしない。彼は他人の車か汽車で移動する。このいかにも生真面目で潔癖な男が当時の車社会に自分から積極的に関与しないのはこの物語の主題とも関連して暗示的である。

次に車が登場するのは第2章で「灰の谷 (the valley of ashes [21])」の住人 George Wilson のガレージに置いてある“the dust-covered wreck of a Ford” [22] である。Ford は「T型フォード」以来、安自動車の代名詞だが、それが無残な姿を晒し、埃にまみれて放置されてある。『荒地』や、Milton の『楽園喪失 (*Paradise Lost*, 1667)』に登場する地獄のイメージを用いて描かれる20年代の大都市ニューヨークの巨大ごみ処理場の片隅で、妻に不貞を働かれながら細々と自動車社会に奉仕し、その自動車によって妻を奪われ、悲しみと誤解から Gatsby を殺害した後、自分も自殺するこの男の生きざまは文字どおり「残骸のようなフォード」さながらであり、万事に派手な Gatsby とは違った意味ではあるが、恐るべき物質主義社会、大量消費と使い捨ての社会の犠

性者と言えるだろう。

第2章にはまた、Tomの情婦Myrtleが、TomとNickと一緒にマンハッタンの“West Hundreds” [25]にあるアパートへ向かう際にPenn Stationでわざわざ選んで拾う“taxi cab”も登場する。これは“a new one, lavender-colored with gray upholstery” [24]ということだが、彼女が犬売りを発見して急停車させる際、「身を前に乗り出してフロント・ガラスを叩いた (leaning forward, tapped on the front glass [24])」という件りがあり、運転席と客席の間がガラスで仕切られていたことを示していて興味深い。この小説はこうしたさりげない部分に時代の風俗が描き込まれているが故に、時として意外に難解でもあるのだが、貴重だとも言えるのである。

第3章には、Gatsbyの夜会のために客を送迎する彼所有の2台の車、すなわち“Rolls-Royce”と“station wagon” [33]への言及があり、この他、夜会からの帰りに泥酔した客が「ふくろう眼鏡の男 (Owl Eyes [44])」を乗せながら車を壁に当てて車輪を外してしまうという“a new coupé” [44]も登場する。このうちRolls-Royceは、いかにも成金のGatsbyが欲しがりそうなクリーム色の巨大なイギリス製特注車で、この小説の筋の進行になくはならぬ重要な役割を帯びており、歌舞伎狂言で言う「狂言回し」の性格を有する。一方station wagonは終章で、Gatsbyの葬儀の際に墓地まで走る3台の車のうちの一台ともなる。

第4章では、まずGatsbyが第3章で既に紹介されたRolls-RoyceでNickを迎えにやって来るが、その時の描写はこうである。

It was a rich cream color, bright with nickel, swollen here and there in its monstrous length with triumphant hat-boxes and supper-boxes and tool-boxes, and terraced with a labyrinth of wind-shields that mirrored a dozen suns. Sitting down behind many layers of glass in a sort of green leather conservatory, we started to town. [51]

上の文章が全くの事実なのか多少の誇張を含むものなのか、はっきりとは分からないが、いかにも巨大でものものしい、そして多分におとぎ話にでも出てきそうなファンタジックないでたちの車ではある。また、この時初めて向こうから車に乗って Nick の家にやって来た Gatsby の姿がいかにもせわしなげで「落ち着きなく (restless)」誠に特徴的なまでにアメリカ的 (so peculiarly American) [51] というのも、自動車社会の特質と重なるものであり、印象的である。

At nine o'clock, one morning late in July, Gatsby's gorgeous car lurched up the rocky drive to my door and gave out a burst of melody from its three noted horn. . . .

"Good morning, old sport. You're having lunch with me today and I thought we'd ride up together."

He was balancing himself on the dashboard of his car with that resourcefulness of movement that is so peculiarly American—that comes, I suppose, with the absence of lifting work in youth and, even more, with the formless grace of our nervous, sporadic games. [51]

Gatsby の Rolls-Royce が Nick の家の玄関先に現れ、三連クラクションを鳴らす。そして Nick に語りかけるのであるが、ここに問題になる表現がある。Gatsby が落ち着きなく、絶えず体を動かしているのがアメリカ人特有という Nick の説明は分かるとしても、「(彼の) 車の "dashboard" で体のバランスを取っていた」とはどのような動作、姿勢なのであろうか。言うまでもないが、"dashboard" とは、馬車ならば「泥よけ」であろうが、自動車についていう場合は普通「計器盤」のことである。どのようにして「計器盤」で体の均衡を保つのであろうか。もっとも馬車の時代には "dashboard" が泥よけを意味したところから "running board" 即ち「(泥よけから伸びる) ステップ」と混同されたのかもしれない。当時の自動車には大抵長い泥よけとステップが付いていた。

そこへ乗って体のバランスを取ることは容易であろう。この見解に立ったと思われる Arthur Mizener は自ら *The Fitzgerald Reader* を編纂した折に、テキストのこの個所の “dashboard” を “running board” へと変更した。ところが、Matthew Bruccoli は最近のケンブリッジ版の *The Great Gatsby* の注釈部で次のように書いている。

It is possible to perch on the dashboard of an open car. Emendation to *running board* in *The Fitzgerald Reader*, ed. Arthur Mizener (New York: Scribners, 1963) is unnecessary and incorrect.¹³

どちらが正解なのか。Bruccoli には、これがいかなる姿勢なのかもっと説明してもらいたいものだが、いずれにせよ、僅か 70 年ほど以前に書かれた小説の一場面における表題人物の比較的重要とも思われる一動作がアメリカ人の、しかも高名な学者でも特定できないというのは興味深いことではなからうか。そしてこうした類例は本小説中少なからざる数にのぼるのである。

Gatsby と Nick はこの巨大な車で、天馬を駆る者たちの如くに ([w]ith fenders spread like wings [54]), 街へ繰り出す。途中まず悲しげな目をした東欧系の人たちの葬列と出会うが、Nick は彼らの陰鬱な日に Gatsby の “splendid car” が加わったのはよかったと言う。次に 3 人の黒人が乗り白人の運転手が運転する “limousine” [55] と擦れ違おうが、彼らは高慢な対抗意識を丸出しにする。Cadillac などの大きな車を所有するのが黒人の夢だった時期がかつてそう遠くない過去にあったが、これはそのほしりでもあろうか。またスピードを出し過ぎたこの Gatsby の車を追いかけてきた交通警官のオートバイおよび、その排気音, “jug-jug-spat!” [54] もなかなか印象的で、Fitzgerald の観察力、車への興味のほどが伺われる。

この章では更に Jordan Baker の回想として、Daisy の出身地ケンタッキー州ルイヴィルで、Daisy と出征前の Gatsby とが短い逢瀬を楽しんだ際に使わ

れた彼女の“white roadster” [59] が登場する。ロードスターとは二人乗りのオープンカーのことであるが、白塗りというところが南部貴族風であり、ロマンティックでもある。また車の歴史上オープン・カーはアメリカ人よりもイギリス人、特に貴族のお気に入りであったところから、Tom および Daisy のイギリス風ライフ・スタイルへの俗物的志向が現れているとも言える。ちなみに彼らは元来そうした志向の強い establishment の住居地たる East Egg に“Georgian colonial mansion” [9] を構えている。

第4章には、もうひとつ、新婚間もない頃、カリフォルニアで Tom が早くも浮気し、女性とドライブ中に荷車にぶつけ、車輪を外した車 [61] なるものも言及される。

第5章、つまり Daisy と Gatsby との再会の章では、雨の中、Daisy が“a large open car” [67] に乗って Nick の家を訪れる。これは後に第7章で一同が街へ出掛ける時に Gatsby の Rolls-Royce とペアになる Tom の家の車、つまり“a blue coupé”であると思われる。偶然かもしれないが、結婚前の Daisy は白いクーペに乗っており、結婚した後は同じクーペでも「青い」クーペに乗っているというのは、彼女の内面の変化と何らかの関連があるのかも知れない。

第7章では Gatsby の Rolls-Royce と Tom (Daisy) の blue coupé の2台の車が、街に出掛ける一同を運ぶが、帰り道で、取り乱した Daisy の運転する Gatsby の Rolls-Royce が、「灰の谷」の Wilson のガレージ前、つまり巨大な眼鏡屋の看板の直下で、突然飛び出して来た Myrtle をはね殺す。Daisy は停止することなく車を走らせ続け、途中で Gatsby が停車させ、その後は彼が運転してまず East Egg に到着し、Daisy を降ろし、更に West Egg に戻ってガレージに収める。この不幸な車はそこで二度と主 Gatsby が運転せぬままとなる。

ところで、街に向かう Tom, Nick, Jordan の3人を乗せた Rolls-Royce が「灰の谷」で給油する際、車を止めようとした Tom が「両方のブレーキをせわ

しなく踏みつけた (threw on both brakes impatiently)」 [95] とあるが、この「両方のブレーキ」とは何であろうか。駐車用のブレーキまで踏んだということなのであろうか。また、同じ3人を乗せた coupé が家路を急ぐ場面に “We drove on toward death” [106] という表現が出てくる。「全速力で」という意味であろうが、直後に起こる Myrtle の事故死をも示唆するし、また直前に Nick がひとり想う「30歳」という年齢の重みのことを考えると、Nick ら3人は確かに (多少オーバーだが) 「死に向かって走り続けた」ことにもなり、自動車用語がこれだけの意味合いを持ち得るとするのは極めて興味深い。

終章の第9章では、Wilson に殺害された Gatsby の葬儀が行われ、“a motor hearse” と “limousine” それに “Gatsby’s station wagon” の3台 [135-36] が僅かばかりの会葬者を乗せて、雨の中 Nick の義憤とともに墓地へと向かう。

なお第6章には直接車は登場しないが、車と馬との興味深い対照が見られる。Sloane 夫妻という East Egg の住人が Tom を伴っての乗馬の帰途、West Egg の Gatsby の邸宅に立ち寄る。Sloane 夫人が、West Egg の住人たちへの軽蔑から反対する夫の意向にも拘らず Gatsby と Nick を自宅での食事に誘おうとすると、Gatsby が、“I’ve never bought a horse. I’ll have to follow you in my car.” [80] という場面がある。Rolls-Royce を所有する Gatsby も「馬」までは買ったことがなく、乗馬の3人を「車で」追いかけるというのは “Trimalchio” 即ち新興成金の Gatsby と establishment 即ち既成の金持階級たる Sloane 夫妻や Tom との余裕の差を暗示しているようである。これは、第7章で Tom が、厩を改造して車庫にするものは大勢いるが、車庫を厩にしたのは俺ぐらいだと自慢する事実とも呼応する。既成の金持ちたちには、たとえ彼らの如き俗物であっても、イギリス貴族風的生活への志向がある一方、新興成金は金に任せて Rolls-Royce を買い、それを乗り回す位がせいぜいということろなのであろうか。

III

車が出揃ったところで『偉大なるギャッツビー』における車の用いられ方と意義という問題に入ろう。これはこの小説が伝える moral message とも、主題とも密接に係わることなので、まずそれらに言及しておく。

この小説の冒頭部分で語り手の Nick が登場して間もなく次のように述べる場面がある。

When I came back from the East last autumn I felt the world to be in uniform and at a sort of moral attention forever; I wanted no more riotous excursions with privileged glimpses into the human heart. Only Gatsby, the man who gives his name to this book, was exempt from my reaction—Gatsby, who represented everything for which I have an unaffected scorn. [5-6]

この後直ぐに語り始められる物語が「特権を与えられて人間の心の中へ騒々しく入り込む旅」のいまひとつの試みであり、その忌まわしい旅の中心に「私の偽らざる軽蔑の対象のすべてを体現していた」ギャッツビーがいたのであり、そのギャッツビーと彼が最後に交わした（そしてその後いつも言っておいてよかったと思う）言葉が“*They're a rotten crowd. . . . You're worth the whole damn bunch put together.*” [120] であったというのであるから少々ややこしいが、要は「東部（の連中）」が「腐っている」中で、すべてにおいて Nick の趣味には合わないけれども、「腐った連中全部まとめたぐらいの価値がある」と奇妙な賛辞を呈し、ひと言語らずにはおられない（魅力的な）人物がギャッツビーだったということになる。言うまでもなくそれは、外見には金まみれそのものでありながらも、ギャッツビーだけは心が「腐って」はいなかったからである。「世の中全体が軍服を着て、絶えず精神的に気をつけの姿勢を取ってほしいと思った」というのは、この小説全体の伝えるモラル・メッセー

ジだと言ってもよいであろう。それほどNickの目には世の中が、つまり当時人心が特に東部においてたるみ、「腐って」いるように写ったのである。Nickの語るこの小説は、不注意、不誠実、無責任、盲目的、衝動的、刹那的といった人物、事物のオンパレードといった観を呈する。無論このことは対照的に語り手Nickの几帳面さ、誠実さを際立たせることにもなるのだが、上記のイメージ群のくどいほどの繰り返しは、もとよりこの物語の主題もどこかその辺りにありそうなことを物語っている。

不注意、不誠実などのイメージャリーと並んで読者の注意を引くのは、同じく繰返して登場する「驚異 (wonder)」と「繁栄 (flower)」という2つの語、およびそれらが代表すると思しき2つの世界の対比¹⁴である。出征前のGatsbyが或る秋の晩のこと、この2つの間の選択を迫られた時のファンタジックな場面 [86-87] は『偉大なるギャッツビー』の中でも指折りの印象的場面であろうが、この時彼は「神の仕事 (His Father's Business)」即ち「驚異 (wonder)」への奉仕と、目の前のDaisyとの間の選択を迫られ、結局Daisy、即ち“flower”を採った。しかしこの選択は戦争で引き裂かれる2人にとっては(文字通り)実を結ばなかった。帰還後大いなる失望を味わったGatsbyは、今度はDaisyを次第次第に実物以上の存在、夢あるいは理想の投影体にまで高めつつ追い求めることになる。彼は“wonder”を求め始めたのである。それは几帳面で誠実ではあるが傍観者的で面白味のないNickの心を動かし、或る種の教育さえ与えることになった甚だロマンティックな行動なのだが、この種の行動の宿命で無残な最後を迎える。しかしNickの語るこの『偉大なるギャッツビー』という物語全体はそのGatsbyの行動を尊いものとして肯定する。物語の結びの文句はその何よりの証であろう。

Gatsby believed in the green light, the orgastic future that year by year recedes before us. It eluded us then, but that's no matter—tomorrow we will run faster, stretch out our arms further. . . . And one fine morning—

So we beat on, boats against the current, borne back ceaselessly into the past. [141]

ここにはその昔、「アメリカの夢」なるものがまだ明確に「驚異」の念、つまり人類の歴史上稀に見るほどの理想主義によって支えられていた当時のアメリカを肯定する語り手の（恐らくは Gatsby によって触発された）楽観主義が顔を覗かせている。彼 Nick Carraway が望むのは、生きる意味を見失った幻滅の時代にあっても、物質的充足欲や衝動的行動に身を任せるばかりで精神的に「腐って」しまわず、昔の、驚異の念をも忘れぬ、若々しく、希望に満ちた、ピリッと締まった秩序ある世界の復権ではなからうか。その昔、17世紀に初めて現在のニューヨークに辿り着いた「オランダの水夫たち」が「繁栄」の約束に胸を膨らませると同時に、「驚異」の念にも浸ったアメリカの原精神への復帰と言ってもよい。とすれば彼の語った物語は、「驚異の復権」を主張する物語と見え、それが恐らくこの作品の主題でもあろう。

1920年代という時代は、Nick にとってのみならず、恐らく多くの人間にとって、上述の如き精神的な意味に裏打ちされた「アメリカの夢」から最も遠い時代のひとつであった。精神のタガが戦争によって失われ、刹那的享楽に身を任す他に人生に意味がなく、ひたすら物質的充足に走ることでその空虚感を埋めるというのが多くの人々に共通する本音であった。自動車事故を起こすに至る日の、街へ出かける前の Daisy の科白はそれを実によく表している。

“What'll we do with ourselves this afternoon?” cried Daisy, “and the day after that, and the next thirty years?” [92]

そこで話を自動車に戻すと、その自動車とはこの物語の中で、ことごとく Nick が声を大にして糾弾するこの時代の不注意、盲目性、不誠実、無責任、衝動的行為、刹那的生き方などを表す道具あるいは象徴となっていることに注目

したい。車は20年代の人々にとって、物質的充足欲を満たすのみならず、走ることで精神的な空虚感を紛らわすという一石二鳥の存在であったと思われる。

この小説で初めに自動車が、単なる風俗でなく或る種の重要性をもって登場するのは第3章における2つの場面である。既に前節で触れているように、Gatsbyの夜会からの帰途、酔客が運転を誤って壁に車をぶつけ、車輪を外す件りと、NickとJordanがあるパーティーの席上で車の運転に関する“a curious conversation” [48]を交わす場面とである。前者は、Gatsbyの館の玄関先の路上で起きた脱輪事故で、行く手を塞がれた後続車のヘッドライトによって事故車およびそれから這い出してくる2人の人間の模様が語られる。初めて出て来たのはGatsbyの書斎にいた「ふくろう眼鏡の男」であり、この男が運転していたと思った人々が彼をたしなめ、以下のような対話を取り交わされる。

“How’d it happen?”

He shrugged his shoulders.

“I know nothing whatever about mechanics,” he said decisively.

“But how did it happen? Did you run into the wall?”

“Don’t ask me,” said Owl Eyes, washing his hands of the whole matter. “I know very little about driving—next to nothing. It happened, and that’s all I know.”

“Well, if you’re a poor driver you oughtn’t to try driving at night.”

“But I wasn’t even trying,” he explained indignantly, “I wasn’t even trying.”

An awed hush fell upon the bystanders.

“Do you want to commit suicide?”

“You’re lucky it was just a wheel! A bad driver and not even *trying!*”

“You don’t understand,” explained the criminal. “I wasn’t driving. There’s another man in the car.” [44-45]

驚く見物人たちの前で、事故車から「もう一人の男」が這い出してくる。この男は泥酔状態で車が動かなくなったのは燃料切れを起こしたからと思ひ込んで

おり、車輪が外れてなくなっているという事実をなかなか飲み込めず、バックする (Back out / Put her in reverse) [46-47] などと言い、再度車輪がはずれているとの指摘の後にも “No harm in trying” [46] などと言ってのける始末である。呆れた Nick は現場を後にするが、この頃までに現場では狂乱パーティーの果てにふさわしく「交尾期のネコのように騒がしい (caterwauling) [46]」クラクションの合唱が響き渡っていたという。「ふくろう眼鏡の男」の正体も不明ながら、馬鹿でかい眼鏡は第2章冒頭の、「灰の谷」を見つめる眼鏡屋の色あせた看板、Dr. Eckleburg の目、すなわち眼力の衰えた神の目（これは勿論『荒地』の預言者 Tiresias と関連する）と繋がるイメージであるとともに、本来夜にこそ目が効くべき「ふくろう」が自動車の時代にあっては全く目が効かない (I know nothing whatever about mechanics. . . . I know very little about driving—next to nothing) [44] 皮肉でもある。これは退廃と狂乱の20年代の縮図のような場面が自動車（特に飲酒運転による事故）を中心に描かれた一例で、言うまでもなく後に起こる最大の action、つまり Daisy による Myrtle ひき逃げ事故の foreshadowing に他ならない。なお、別の個所で、同様の脱輪事故が新婚旅行中に早くも別の女性に手を出して同乗させていた Tom によって、自分の車を “wagon” に当てることで、起こされていることも報告され、いずれの事故でも自動車の車輪が外れてしまうのは、性的モラルを含む秩序の崩壊を物語ると言ってよいだろう。

もう一つの場面は、Nick と Jordan とが Warwick という所の或る家のパーティーに招かれ、Jordan が他人から借りた車のホロを下ろすのを忘れて雨で濡らしてしまったのをごまかそうとして嘘をついた日のことで、車を急発進させた Jordan がそばにいた人のコートのボタンを泥よけ (fender) で引っ掛けた際の、次のようなやりとりである。

“You’re a rotten driver,” I [Nick] protested. “Either you ought to be more careful, or you oughtn’t to drive at all.”

“I am careful.”

“No, you’re not.”

“Well, other people are,” she said lightly.

“What’s that got to do with it?”

“They’ll keep out of my way,” she insisted. “It takes two to make an accident.”

“Suppose you met somebody just as careless as yourself.”

“I hope I never will,” she answered. “I hate careless people. That’s why I like you.” [48]

この時点での Nick は、Jordan の無責任さも、常習化している嘘も、不注意さをも許し、彼女との束の間の恋愛へと進むのだが、物語の終局で彼が東部を去る理由が東部社会の人々の無責任さ、不誠実さ、不注意さへの反発からであったことを思えば、Jordan の振舞いこそはこの時代の東部社会のそのの典型であり、彼女のいい加減な運転に対する Nick の批判は、物語冒頭の「精神的な気を付け」を要請するメッセージともども、はっきりこの小説の時代への批判的言辞と解される。なおついでながら Jordan Baker という名前は、20 年代の自動車メーカー 2 社、Jordan と Studebaker からの造語という説がある¹⁵。

しかし、何と言ってもこの小説中最大の action は、Daisy と Gatsby とが乗り、Daisy が運転する Rolls-Royce が、街からの帰途、「灰の谷」のガレージの前、例の Dr. Eckleburg の「目」が見つめる下で、急にガレージから飛び出してきた Myrtle をはね殺すというものである。往路でこの黄色の大きな車は Tom が運転していたところから、Myrtle は Tom だと思って駆け出てきたのであって彼女は即死するが、Daisy は車を止めもせず走り去り、さらには Gatsby の好意に甘えて彼に罪をかぶせてほおかむりしてしまう。

この不幸な自動車事故には、もとより原因があり、一種の必然性すら有する。「夏の終わりの、しかし一番暑い日」[89] のこと、Gatsby と Nick とが Daisy の招きで Tom の家に昼食に行く。そこには Jordan もいた。昼食後、手持ち無沙汰の中、Daisy, Tom, それに Gatsby の三者の間で気まづい空気が流れ始め、

一同は Tom の気まぐれの発案で、街へ出かける仕儀に至る。意地の悪い Tom の提案とそれを巡る悶着の末、奇妙なことに、往路は Tom, Nick, Jordan が Gatsby の「サーカス自動車 (this circus wagon) [94]」で、Gatsby と Daisy とが Tom の coupé で行くこととなる。途中 Wilson のガレージで給油する際、Tom は妾の Myrtle が近々夫の Wilson とともに西部へ旅立つという知らせを受け、しかも本来の妻たる Daisy も突然現れた彼女の昔の恋人 Gatsby に奪われかねない状況にある。先を行く Gatsby と Daisy の車の後を追う Tom の狼狽した心理が運転ぶりに現れる。

There is no confusion like the confusion of a simple mind and as we drove away Tom was feeling the hot whips of panic. His wife and his mistress, until an hour ago secure and inviolate, were slipping precipitately from his control. Instinct made him step on the accelerator with the double purpose of overtaking Daisy and leaving Wilson behind, and we sped along toward Astoria at fifty miles an hour until, among the spidery girders of the elevated, we came in sight of the easygoing blue coupé. [97]

そして一同は“Plaza Hotel”の特別室に入るという「不可解な行動 (the less explicable step) [98]」を取る。会話の成り行きと異常なほどの暑さも手伝って Tom と Gatsby とが Daisy のことで激しい口論に及び、自分をめぐるとの 2 人の男の争い——一方での Tom の悪口雑言と、もう一方での Gatsby の弁解——に耐えきれなくなった Daisy が Gatsby とともに今度は Rolls-Royce でホテルを離れ、Nick, Jordan, Tom は coupé で後を追う。往路と車を替えての帰宅である。後で分かることだが、非常な興奮状態にあった Daisy の運転中に、たまたまこの時夫の Wilson と言い争いをして道路に出た Myrtle が、たまたまそこへ通りかかった黄色い車を Tom と思って駆け寄ろうとしてはねられたのである。

このように、引逃げ事故はこの「一夏の物語」のうちでも最も暑い日に、主

として Tom 夫妻の衝動的で支離滅裂な一連の行動の延長線上で起きる。そして事故が起きるや Daisy はその責任を、心配して一晩中外の闇の中で騎士道精神を発揮して立ち尽くす男にかぶせ、自分は再び Tom のもとへと舞い戻る。Tom は Tom で、現場で事故の真相を察知するや、犠牲者の夫の Wilson に、矛先が Gatsby に向くよう嘘の情報を与えて恥じるところがない。Myrtle や Wilson、それに Gatsby の犠牲において、この破廉恥な夫婦は一時的に撚りを戻したのだが、何ともいい気なものである。この衝動的で、不注意で、無責任な夫婦の生きざまを、彼らが操る車および彼らが係わる自動車事故は誠に見事に表わしているのである。Nick は言う。

They were careless people, Tom and Daisy—they smashed up things and creatures and then retreated back into their money or their vast carelessness or whatever it was that kept them together, and let other people clean up the mess they had made. [139]

その“other people”の中に、死んで Daisy の身代わりとなった Gatsby と、Daisy や Tom の代わりに Gatsby の葬儀を執り行った Nick 自身が含まれているのは言うまでもない。

IV

19 世紀の技術革新の中から生まれ、20 世紀には大量生産から洪水のように巷に溢れだし、その後のアメリカ人の生活様式を大きく変えた自動車。広大な土地空間と本来動き回るのが大好きな国民性の支持を受けて、1920 年代には「一人一台」とはゆかぬまでも「一家に一台」ぐらいにそれは普及するに至った¹⁶。

しかし自動車が普及したその時代は、恐らく自動車にとって不幸なことに、アメリカ史上「金メッキ時代 (the Gilded Age)」¹⁷ に勝るとも劣らぬ物質至上主義的で、精神の荒廃が進み、人々が人生に於ける目的感の喪失から刹那主義

に陥り、衝動的な行動に走った時代でもあった。恐らくは多くが禁制の酒をあおりつつ。1920年代は、従って、驚くべき数の自動車事故が早くも起こり、驚くべき数の犠牲者が出ている¹⁸。現在の交通信号が確立されたのもこの頃であったのだが¹⁹、ギャッツビーが信じた“the green light”がその交通信号の「進め」のサインでもあったのは、時代とはいえ誠に皮肉である。

この意味で、いろいろな自動車が登場し、不注意な人間が、目の効かない神の監視の直下で（「灰の谷」のはげた眼鏡屋の看板の直下で）自動車事故を起こし、責任を取らず、後始末もせず、それを他人に押しつけて平然としているという『偉大なるギャッツビー』の展開は、まさしく自動車の歴史から見た1920年代を代表するものと言えよう。こんな時代の荒廃した状況を、それぞれ「腐った」人々の操る自動車は、単なる風物であることを越え、この上もなくよく象徴しているのである。

すべてが終わった時、Nick はあまり使うこともなかった自分の“an old Dodge”を「食料品店」に売り、「何の意味も生まずに終わった」Gatsby の邸宅を最後に見にゆく。月光の中、時の流れを経てGatsby の夢と「オランダの水夫たち」の目に映じた「新世界の初々しい緑の胸懷 (the fresh, green breast of the new world) [140] が彼の目にも映じる。その後 Nick は、かつて「予備校、後には大学から、西部へ帰省した時の [136]」鮮やかな記憶どおり、シカゴのユニオン駅経由で「本当の雪、我々の雪 (real snow, our snow) [137]」の降る故郷ミネソタへ汽車で向かったものと思われる²⁰。彼の故郷、中西部こそは、古き良き時代のアメリカ、田舎臭いが自動車事故も「腐った」人間もまだそれほど多くはない世界だったはずである。

NOTES

1. アメリカが第一次世界対戦に参戦したのは、本論が扱う *The Great Gatsby* にも出てくるように、1917年になってからであり、1年ほどして戦争は終わった。参戦はドイツの潜水艦Uボートによる無差別攻撃で自国の艦船が被害を被りだしたの

- が端緒である。大戦で欧州全土は手酷い損害を被ったが戦地を遠く離れたアメリカは、少なくとも国土は無傷であり、しかも戦争需要が経済を潤した。
2. 1890年代には Ford の他、Charles Duryea および J. Frank Duryea の “Duryea Brothers”, Elwood Haynes, Ransom Olds, Alexander Winton らもほぼ横一線で自動車開発に従事していた。
 3. F. L. Allen, 『二十世紀アメリカ社会史』(佐藤亮一・平松幹夫訳) 角川書店, 1952年, 12頁。
 4. 奥村正二『世界の自動車』岩波新書, 1964年, 49頁。
 5. 1925年には *The Great Gatsby* や *An American Tragedy* の他, John Dos Passos の *Manhattan Transfer*, Sherwood Anderson の *Dark Laughter*, Sinclair Lewis の *Arrowsmith*, Hemingway の *In Our Time*, Ellen Glasgow の *Barren Ground* などが出版されており, 翌年には Hemingway の *The Sun Also Rises* が出版されている。
 6. Malcolm Cowley は彼らを “exiles” と呼び, その心理を論じた *Exiles Return* を 1934年に著した。
 7. *The Great Gatsby* と *An American Tragedy* とは, 同年の出版である他, 「アメリカの夢」を追い求めて挫折する青年を描いている点でも似ている。しかし, 前者が挫折した青年の生きざまを対照的な性格の青年の感性のフィルターを介して肯定的に, モダンな言語で語るのに対し, 後者は前世紀末の自然主義の系譜に属し, 社会が個人(その青年)を必然的に滅ぼしてゆくプロセスを全能の視点から長々と, 無骨な文体で記述する古いタイプの小説であり, むしろこの2つは全く異なった作品であると言ってよい。
 8. Richard Chase はその主著 *The American Novel and Its Tradition* (1957) の第8章, “Three Novels of Manners” (『3つの風俗小説』) において *The Great Gatsby* を (アメリカ伝統の「ロマンス」であるとともに) 風俗小説の一例として取り上げている。また James W. Tuttleton も, その著 *The Novel of Manners in America* (1972) の中で *The Great Gatsby* を風俗小説として論じている。
 9. F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby*, Matthew Bruccoli ed. (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1991), 8. 以下, このテキストへの言及は本文中にページ数のみ示して行なう。尚, 現在この作品のテキストには Penguin 版, Scribner 版などいろいろあるが, いずれも作家の意図したものと若干異なっており, Bruccoli 編のこのケンブリッジ版が最も正確なものと考えられている。
 10. James Trager, 『世界史大年表』(鈴木主税訳) 平凡社, 1979年, 617頁。
 11. 『世界史大年表』620頁。
 12. この2つの作品の影響は, 例えば T. J. Ekleburg の目 (Tiresias の目との類似)

であるとか、第2章の終わりでの「意識の流れ」式の文章に現れていると考えられる。

13. Matthew Bruccoli, 147.
14. アメリカ史を流れる2つの“impulse”がidealismとmercantilismであり、それが“wonder”と“flower”に対応するとする見解がある。cf. John Henry Raleigh, “F. Scott Fitzgerald’s *The Great Gatsby*,” *F. Scott Fitzgerald: A Collection of Critical Essays*, Arthur Mizener ed. (Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1963), 99–100.
15. Richard Lehan, *The Great Gatsby: The Limits of Wonder* (Boston: Twayne, 1990), 88.
16. 1920年のアメリカの人口は106,466,000人で、車の登録台数は8,131,522台であり、13人に1台だったが、1929年には人口121,770,000人に対し23,120,897台となり、5人に1台となっている。Lehan, 9.
17. 南北戦争後の四半世紀が「金メッキ時代」であるが、その物質万能、精神荒廃という特性は1920年代と酷似する。
18. 1920年代には毎年平均で25,000人が死に、600,000人が負傷したという。Lehan, 9.
19. 20年代には最初の改良型交通信号（緑、白、赤の3色）がニューヨークに現れた。Lehan, 9.
20. 或る意味ではこの小説中最も美しく、印象的な文章が、このクリスマス休暇で東部の学校から中西部の故郷へ汽車で戻る際の記憶を描いた最終章の文章であろう。ここには雪や空気の冷たさなどを通して、アメリカ中西部の冬の雰囲気、ひいてはそこに住む人々の腐敗と縁遠い生活ぶりが伝わってくる。当時のシカゴのユニオン駅は全米の鉄道の中心であって繁栄を極めていたが、しかし既にこの頃自動車によるその王座の侵蝕は始まっていたのである。